

年齢段階別にみた子どもの住空間認識の発達[†]

第2報 住空間の実態に対する認知

中 島 喜 代 子*

The Development of Children's Recognition of Dwelling House When Compared with Their Age (Part 2)

Children's Recognition of Storage Space of Household Articles in Their House and Their Home Environment

Kiyoko NAKAJIMA

The purpose of this study is to grasp the children's recognition and directional intention of dwelling house and home life, and to make it useful materials for their education of housing.

In this paper, the children (primal school children, junior high school students and senior high school students) have been inquired of their recognition of the storage space of household articles in their house and their home environment.

The following results were obtained.

- 1) Children's recognition of the storage space of household articles is influenced by the frequency of using them, their size, how to use them, person who use them and whether they will move them or not.
- 2) Girls' recognition of the storage space of household articles in their house is better than boys' one as regards most the storage space of articles. And girls can understand storage space increasingly for the most part as they grow older. But boys' understanding of it decrease for the most part as grow older.
- 3) Children can understand anything abstracts, undaily living space and parents' life as they grow older. But children's recognition of their home environment has little to do with their sex.

1. 緒 言

本研究は、主に認知対象を住宅内部に限って、子どもの成長とともに住空間や住生活に対する認知が、どのように変化・発展するのかについて分析し、今後の住教育に役立てることを目的としている。

前報（第1報）において、子どもの住要求・住評価判断の可否を検討し、さらにその判断内容の

傾向について母親の場合と比較分析することにより、住空間認知発達の状況をとらえた。

引き続き、本報では、具体的な個々の生活用品の置き場所や収納場所の実態に対して、子どもがどの程度認知しているかをとらえ、さらに家庭環境全体についての実態に対する認知の状況についても明らかにすることにより、住空間や住生活の実態に対する認知が、子どもの成長とともにどのように変化・発達するのかについて検討する。

[†] 原稿受理日 昭和62年10月15日

* 三重大学教育学部

2. 方 法

昭和59年7月～9月にかけて、三重県伊勢市内にある小・中・高校を対象に、間接配布留置式の調査を実施し、小学5・6年生253件、中学2年生176件、高校2年生226件の計655件の有効サンプルを得た。なお、調査対象の概要は、第1報の通りである。

3. 調査結果および考察

1) 生活用品の収納場所に対する子どもの認知

調査に用いた生活用品は、図1に示すようにa～sに分類した65品目である。このうち、c～m、qの生活用品については、その一般的な使用頻度を考慮して選択している。

a、生活用品の種類別にみた収納場所および置き場所に対する子どもの認知

各生活用品の品目ごとの収納場所（固定している家具や電気製品については置き場所）に対する認知を、「全部知っている」（認知）、「一部知っている」（部分認知）、「知らない」（非認知）の3カテゴリーに分類して調査した。その割合を、図1に示す。また、同図にその生活用品を子ども自身が出し入れする割合（固定している家具や電気製品については使用率）を示す。なお、所有していない場合については除いている。本研究では、住宅における「収納」とは、「住生活にかかわる総ての生活用品の位置的、空間的秩序付け」と定義している。そのため、むき出しに置かれている生活用品等も、すべて収納されている状態ととらえており、家具類等も含めて考えている。

まず、固定している家具類や電気製品の置き場所に対する認知率は、非常に高い。また、これらの生活用品については、一般に、置き場所に対する認知の割合が、それらを使用する割合よりもかなり高くなっている。

冷暖房用品の収納場所に対する認知率は、固定使用する家具類の置き場所認知率より低い。また、調査期間が夏であったため、扇風機に比べ、季節外用品であるストーブの認知率は低い。

自分の衣類の収納場所認知率については、使用頻度の高い下着や普段着では高いが、使用頻度が低い外出着や季節外衣類では低い。一方、父親の衣類は、全品目とも認知率が非常に低く、部分認知率の割合が多くなっている。しかし、その中でも自分の衣類の場合と同様に使用頻度によって認

知率に差がある。

衣生活用品の洗濯用品、アイロンがけ用品、裁縫用品および掃除用品についても使用頻度によって収納場所認知率に差がみられる。また、食生活用品類や健康管理用品についても同傾向がみられる。

予備用品についても、補充周期の短い品目（ティッシュペーパー、アルミホイル、石けん・シャンプー）の収納場所認知率は高いが、補充周期の長い品目（シーツ・ふとんカバー）の認知率は低い。

行事用品の収納場所認知率は非常に低く約4割程度であり、全品目分類中もっとも認知されにくいものであるといえる（ただし、子どもとの関連が強いひな人形では高い）。

客用品の収納場所認知率では、食器類、寝具類とも同程度の割合であるが、客用ゆのみ茶わんは、家族用食器類よりも低い傾向を示す。

事務用品の収納場所認知率では、子どもが使用する機会が多い小型電卓は朱肉よりも高い。環境整備補修用品は、全品目ともほぼ同程度の認知率となっている。

以上のように、生活用品の収納場所に対する子どもの認知は、生活用品の使用頻度、生活用品の使用者、生活用品の使用方法（固定・移動）によって違いがみられる。また、子どもが出し入れする率が高い生活用品ほど収納場所認知率も高い。しかし、父親の衣類や客用品などは、出し入れ率は非常に低い認知率はこれよりかなり高く、出し入れ率と認知率に差がある。

b、子どもの年齢段階別、男女別にみた生活用品の収納場所および置き場所に対する認知

子どもの年齢段階別男女別に、各生活用品の収納場所および置き場所に対する「認知率（全部知っている割合）」を図2-1と図2-2に示し、同図中に男子、女子、男女全体別に、年齢段階と認知段階（「認知」「部分認知」「非認知」）との順位相関係数の有意性と χ^2 検定の有意差について示す。また、図3-1と図3-2には、年齢段階別男女別の各生活用品についての出し入れ率と使用率を示し、検定についても同様に示す。なお、収納場所認知率や出し入れ率等は、性別による差異が大きいため、男女別に分析を加える。

図3-1に示すように、家具や固定している電気製品の使用率は、女子の場合学年とともに増加する傾向がみられる。しかし、男子では高校生で

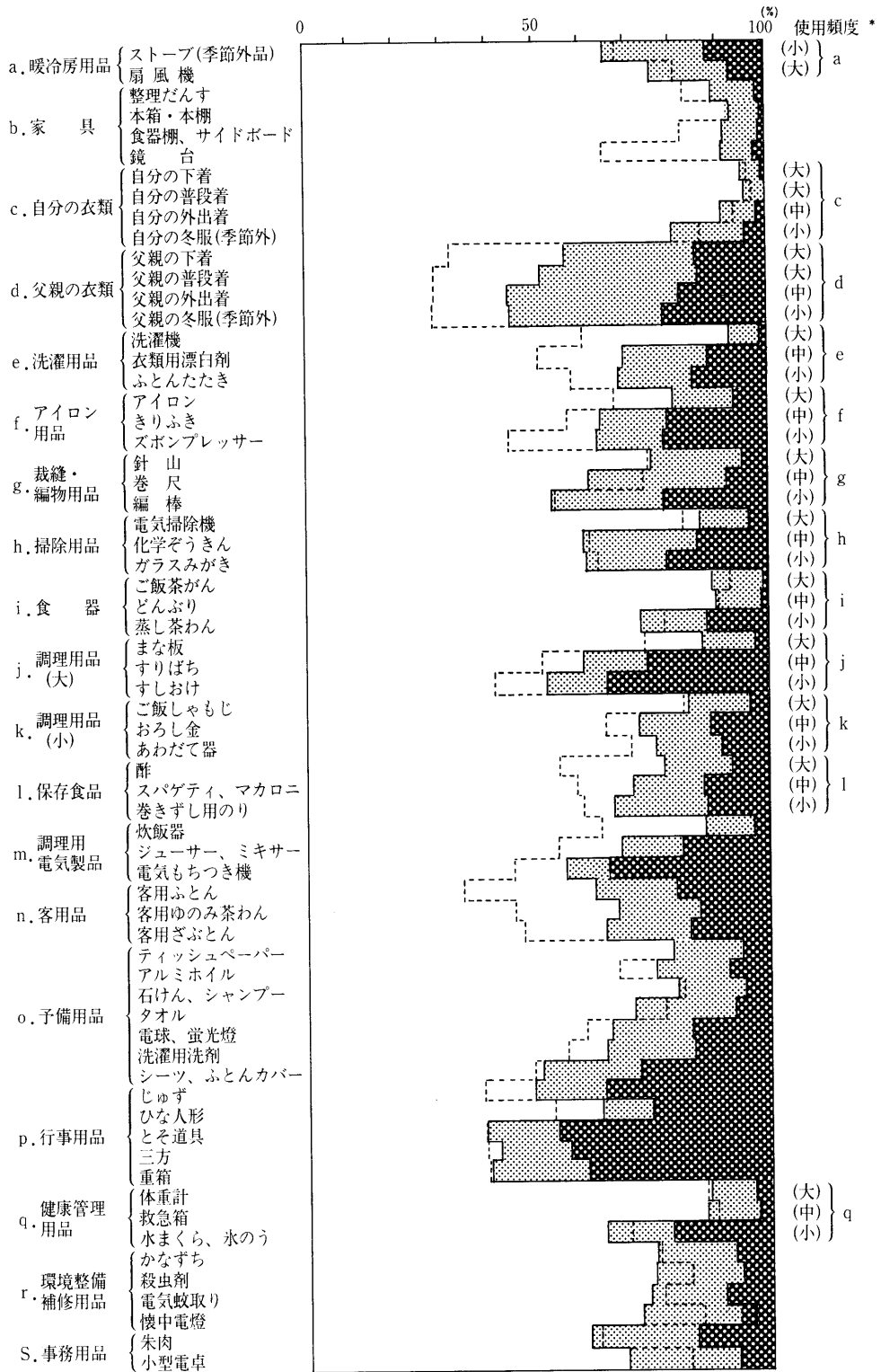
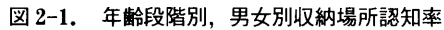


図1. 生活用品の収納場所認知



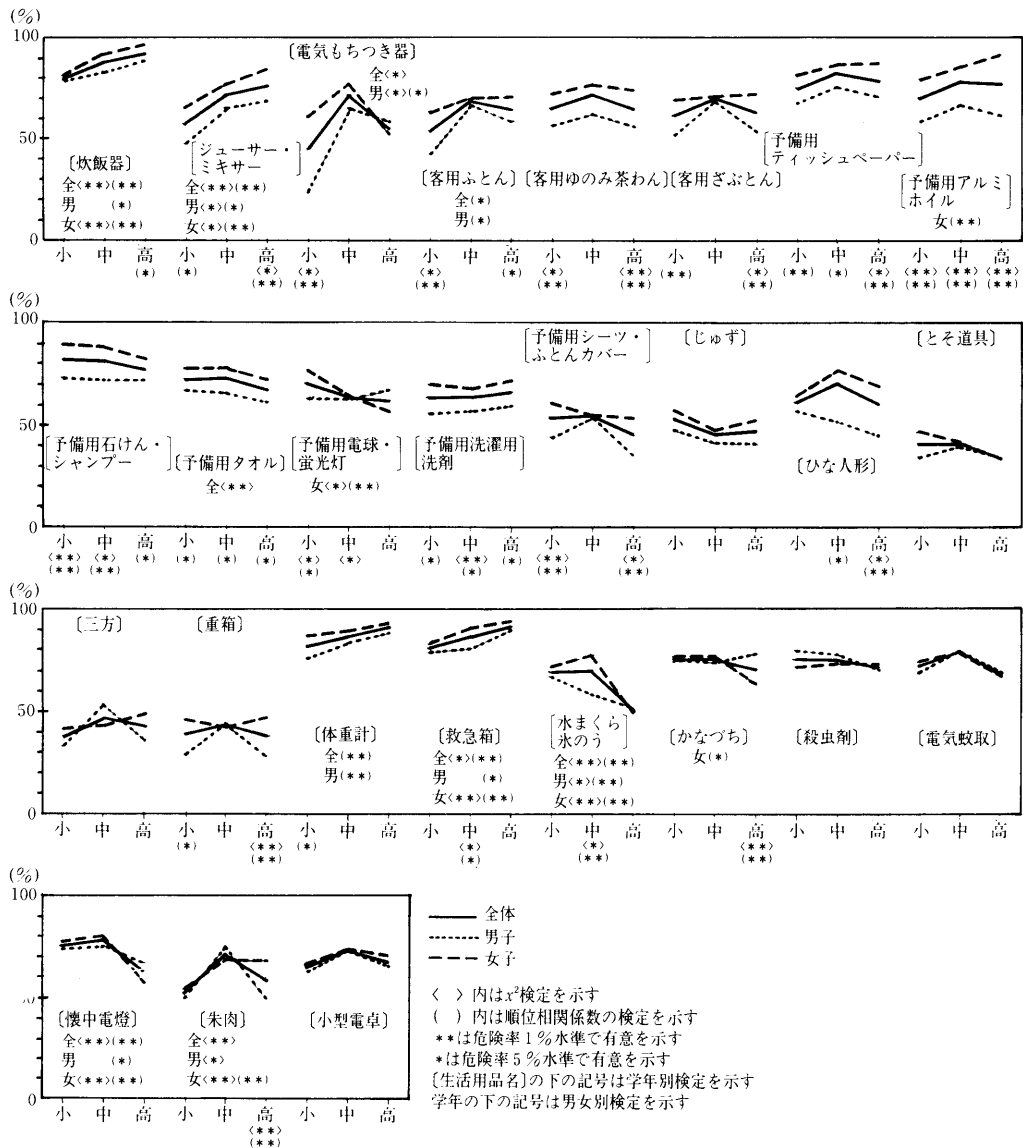


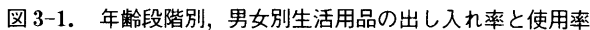
図2-2. 年齢段階別, 男女別収納場所認知率

使用率が低下する傾向が多くみられ、高校生段階で性別による有意差がある。一方、置き場所認知については、各品目とも学年とともに認知率が上昇する傾向があり、男女差は大きくない。すなわち、家具や電気製品など一年中固定使用される生活用品については、使用しなくても置き場所を認知している割合が高い傾向が、特に男子に顕著にみられる(図2-1、図3-1)。

自分の衣類については、出し入れ率、収納場所認知率ともに男女差は大きくない。また、収納場

所認知では、使用頻度の低い衣類において、男女ともに年齢が上昇するに従って認知率の上昇がみられる(図2-1、図3-1)。

父親の衣類については、その出し入れ率は男女とも学年の上昇にしたがって低下しており、出し入れ率自体もかなり低い値を示している。一方、収納場所認知については、女子の場合は学年の上昇による低下率が小さいのに対し、男子では高校生段階での低下率が大きく、他家族員の衣生活に対する関心や理解は非常に薄れるといえよう(図



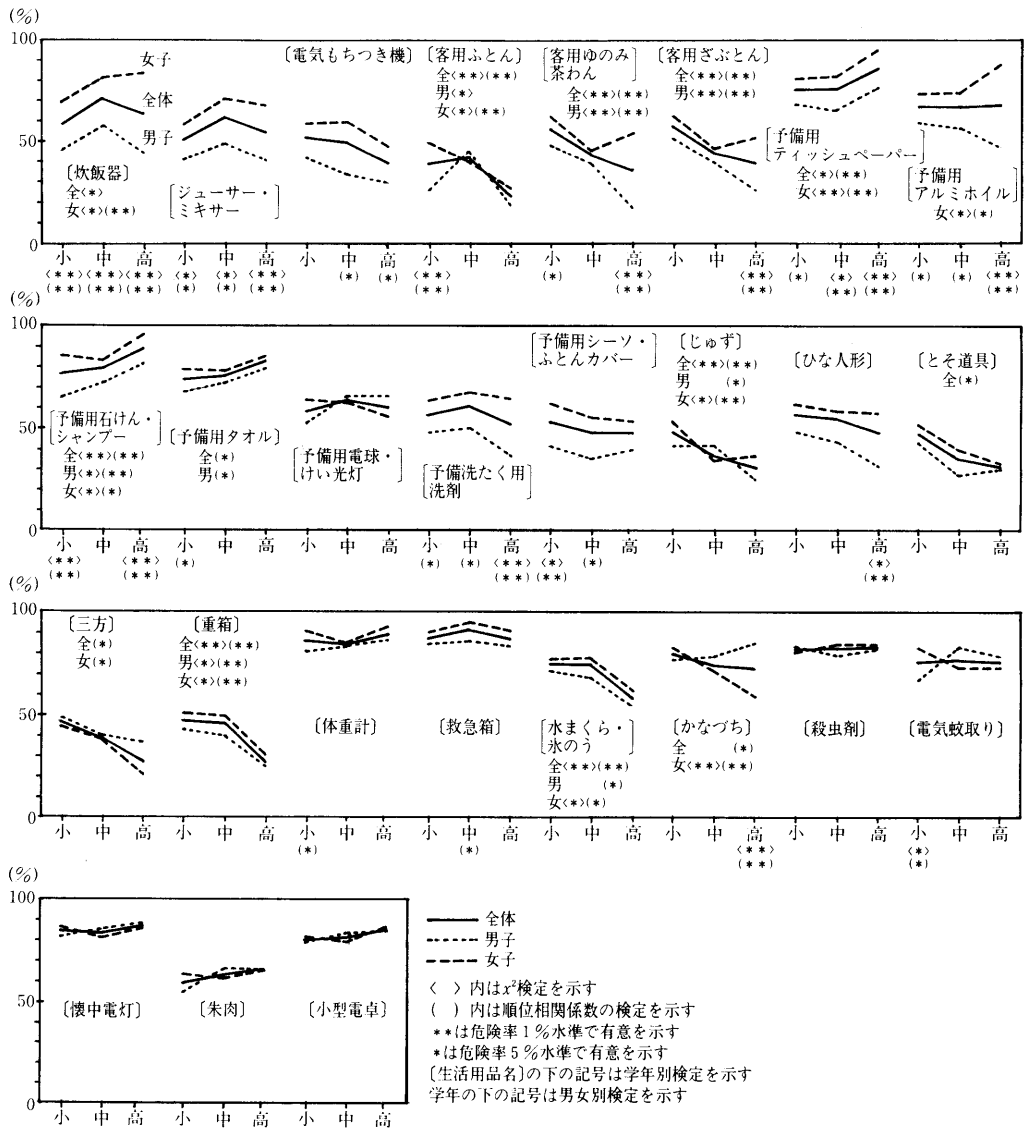


図3-2. 年齢段階別、男女別生活用品の出し入れ率と使用率 (続き)

2-1、図3-1)。

洗濯、アイロンがけ、裁縫等の被服管理用品については、その出し入れ率は、男子の場合、中学生もしくは高校生段階で低下する傾向がみられる(自分で使用する割合が高くなると考えられるズボンプレッサーは例外)。しかし、女子では、多くの生活用品において学年が進むとともに出し入れ率が上昇しており、男女間に有意差がみられる。一方、収納場所に対する認知については、女子では中学生もしくは高校生段階で上昇する傾向が一般的であり、年齢が進むとともに関心が高まると

考えられる。しかし、男子では、中学生で上昇し高校生で再度低下するパターンとなっており、高校生段階では衣生活の管理に対する家事を行わなくなるだけでなく関心や理解も非常に低下するといえよう(図2-1、図3-1)。

掃除等の住生活用品については、その出し入れ率は電気掃除機を除いて男女差は大きくない。しかし、収納場所認知率では、女子の場合、中学生から認知率が上昇するのに対し、男子では各品目とも高校生段階でもっとも低く、男女差も広がる傾向がみられる。すなわち、住生活に関する家事

についても男子では高校生段階で関心や理解が低下するといえる（図2-1、図3-1）。

食器、調理用品、保存食品、調理用電気製品等の食生活用品については、その出し入れ率は、男子の場合、中学生もしくは高校生段階から低下している。しかし、女子の場合調理に関する多くの品目において、高校生段階で上昇しており、男女差は大きい。一方、収納場所に対する認知率では、女子の場合調理に関するほとんどの品目は中学生段階から上昇し、さらに高校生段階でも上昇しているが、男子の場合、食器や調理用品のほとんどは、中学生で上昇し、高校生で低下するパターンとなっている。すなわち、食生活の家事である調理についても、男子では高校生段階で関心が低下するといえる（図2-1、2-2、図3-1、3-2）。

客用品では、その出し入れ率は男女とも学年上昇による低下傾向がみられる。一方、収納場所に対する認知率は、男子では中学生で上昇し、高校生で再度低下しているが、女子の場合学年による差は大きくない。すなわち、男子では、接客に対する関心も高校生段階で低下するといえる（図2-2、図3-2）。

予備用品についてみると、その出し入れ率は、自分で個人的に使用すると考えられる品目については、男女とも学年による上昇がみられるが、家事に用いる品目では男子においては低下しており、電球・蛍光灯は女子において学年とともに低下している。一方、収納場所に対する認知率をみると、学年とともに上昇する品目は一部に限られており、女子では電球・蛍光灯については逆に低下している。しかし、予備用品については、全体的に女子の認知率の方がかなり高く、男女間の有意差も多くみられる（図2-2、図3-2）。

行事用品については、その出し入れ率は、男女とも学年による低下傾向がみられ、ひな人形を除き男女差はみられない。一方、収納場所に対する認知率では、女子の場合学年による差は小さくなく、高校生では出し入れ率よりも認知率の方がかなり高くなっている。しかし、男子では各品目ともに、高校生段階でもっとも認知率が低くなっており、行事に対する関心も低くなるといえる（図2-2、図3-2）。

健康管理用品については、その出し入れ率の男女差は大きくない。収納場所に対する認知では、使用頻度の高い品目については、男女とも学年に

よる上昇傾向がみられる（図2-2、図3-2）。

環境整備補修用品では、まずその出し入れ率をみると、かなづちについては、女子の場合学年の上昇とともに低下し、男子では上昇するため、高校生段階で男女間に有意差がみられる。電気蚊取りもこれとよく似た傾向を示しているが、その他の品目では男女差および学年差はほとんどみられない。一方、収納場所に対する認知でも、かなづちについて、女子の場合は高校生段階で認知率の低下がみられ、男女間に有意差が認められる（図2-2、図3-2）。

事務用品では、その出し入れ率には学年差がなく、男女差も大きくない。一方、収納場所に対する認知では、男女とも中学生で認知率の上昇がみられるが、男子では高校生段階で低下している（図2-2、図3-2）。

以上のように、家事用品類と大工道具等で、出し入れ率および収納場所認知率に男女差がみられ、両者に関連が認められた。しかし、男子の場合、中学生で出し入れ率が上昇する家事用品は、掃除用品と調理用電気製品を除いてみられなかったにもかかわらず、収納場所認知率は、中学生段階において、ほとんどの品目が大きく上昇しており、家事に対する関心あるいは理解は高まると考えられるが、高校生段階ではほとんどの品目について急減しており、家事全般について、家事を実際に行うことが減少する以上に、興味・関心が非常に薄れることが明確になった。女子の場合は、家事用品全般についての関心や理解が、年齢とともに深まるだけでなく、学年とともに出し入れ率が減少する他家族員の持ちものや客用品、行事用品についても、収納場所認知率はほとんど低下せず、逆に上昇する品目もみられるなど、生活用品全般の認知は、年齢とともに上昇するといえよう。

2) 家庭環境に対する子どもの認知

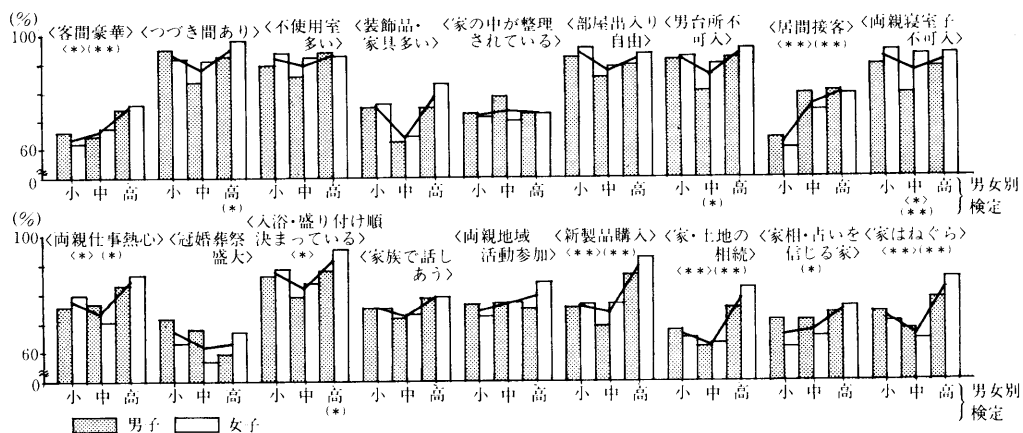
前項では、個々の生活用品に即して、住空間や住生活の実態についての認知をとらえたが、本項では全体的な住空間や住生活の実態に対する子どもの認知について検討する。

表1に示す18項目の家庭環境について、調査対象者の家庭が該当するかどうかについて調査した。〈あてはまる〉〈あてはまらない〉〈わからない〉のカテゴリーのうち、〈あてはまる〉もしくは〈あてはまらない〉と答えた者を、実態認知可能なものとし、〈わからない〉と答えたものを認

表1. 家庭環境項目の分類と認知率（全対象）

家庭環境の項目	対象の区分	認知の対象	認知率 % (順位)
1. 居間や寝室よりも客間の方がりっぱである。〈客間豪華〉	空間の実態	客間	68.2(17)
2. つづき部屋（しょうじやふすまをはずすと2つの部屋が1つになる）がある。〈つづき間あり〉	〃	つづき間	92.4(1)
3. 何も使わない部屋がたくさんある。〈不使用室多い〉	〃	不使用室	91.6(2)
4. 装飾品や家具が多い。〈装飾品・家具多い〉	〃	生活用品	73.4(12)
5. 家の中がきちんと整理されている。 〈家の中が整理されている〉	〃	住宅全体	72.5(13)
6. どの部屋でも自由に出入りできる。〈部屋出入り自由〉	空間の使い方	住宅全体	91.4(3)
7. 両親はよく「男は台所に入るべきではない」と言っている。 〈男台所不可入〉	〃	台所	90.9(4)
8. お客さんを居間を通して家族みんなでもてなす。 〈居間接客〉	〃	居間	71.9(14)
9. 両親のへやにかつてに入るとおこられる。 〈両親寝室子不可入〉	〃	両親室	90.6(5)
10. 両親が仕事や趣味を持っていて熱心である。 〈両親仕事熱心〉	生活の実態	両親の生活	79.0(8)
11. 冠婚葬祭（祭や葬式など）をはでに行なう。 〈冠婚葬祭盛大〉	〃	行事・儀式	64.2(18)
12. お風呂に入る順番や食事の盛り付け順がはっきり決まっている。 〈入浴・盛り付け順決まっている〉	〃	入浴・食事	87.4(6)
13. 大事なことは家族で話し合っている。 〈家族で話しあう〉	〃	家族コミュニケーション	75.7(10)
14. 両親が地域の活動やPTAによく参加する。 〈両親地域活動参加〉	〃	両親の生活	76.6(9)
15. 新しい電気製品や道具が発売されるとよく買う。 〈新製品購入〉	〃	生活用品購入	79.9(7)
16. 両親が子供に、家や土地を受けつぐように言っている。 〈家・土地の相続〉	両親の考え方	家・土地の相続	69.5(15)
17. 家相や占いを信じる家である。〈家相・占いを信じる家〉	〃	家相・占い	69.3(16)
18. 両親は、家はねることができればよいと考えている。 〈家はねぐら〉	〃	住宅の機能	73.9(11)

〈 〉内は、省略項目名 () 内の数字は、認知率の順位



〈 〉内は χ^2 検定による有意差、() 内は順位相関係数の有意性
 **は危険率1%、*は危険率5%水準で有意を示す
 項目名の下の記号は、学年別検定、学年の下の記号は男女別検定を示す

図4. 年齢段階別、男女別家庭環境の実態認知率

知できないものとした。各項目についての調査対象者全体の認知率を表1に示し、学年別・男女別の認知率については、図4に示す。

まず、対象全体の認知率をみると、認知率は92.4%～64.2%の間を示している。この中で、認知率の高い項目は、〈空間の実態〉や〈空間の使い方〉のうち、自分との関連が比較的強い空間や限定された空間に多く、認知率の低い項目は、〈両親の考え方〉にみられる抽象概念や、客間や冠婚葬祭、接客などの非日常的空間や非日常的な生活に多くみられる。

次に、学年別の傾向をみると、抽象概念や非日常的空間や生活および両親の生活等については、子どもの成長に従って認知率が上昇する傾向が認められる。しかし、そのほとんどは、高校生段階において認知率の上昇がみられるものである。また、中学生段階で認知率が低下する項目が約半数みられるが、これは前報においてもとらえたように、現実の判断に対し、より深く慎重に考えるようになるためと考えられる。

男女別の傾向をみると、中学生段階あるいは高校生段階で、女子の認知率の方が高い項目がややみられるが、全体的に男女差は大きくない。

4. 結 語

生活用品の収納場所および家庭環境の実態に対する子どもの認知の状況をとらえるため、小・中・高校生にアンケート調査を実施し、年齢段階別、男女別に分析した結果、以下の知見を得た。

1) 生活用品の収納場所に対する子どもの認知は、生活用品の種類によって異なっており、使用頻度、モノの大きさ、使用方法（固定・移動）、生活用品の使用者（本人専用品、他家族専用品、客用品、家族共用品）の差異およびそのモノの出し入れを

子ども自身が行うかどうかによって、違いが認められた。

2) 生活用品の形態が大きく、固定使用する家具や電気製品および本人の衣類等は、男女とも年齢の上昇とともに収納場所に対する認知率も上昇する。

3) 子どもの年齢段階と収納場所認知との関連を男女別に検討した結果、生活用品の出し入れ率と収納場所認知率との間に関連がみられ、女子では年齢上昇とともに、ほとんどすべての生活用品の収納場所認知が進んでいるが、大工仕事や電球の交換等主に男子が行うことの多い生活用品については低下することが認められた。男子では、年齢とともに認知が上昇するのは、自分の衣類や家具、電気製品、個人的に使用する生活用品等に限定されており、その他のほとんどの生活用品では、高校生段階で認知率の低下がみられた。すなわち、女子では年齢上昇とともに家庭内の仕事に従事することが多くなり、住空間や住生活に対する理解も上昇するが、男子では家庭内の仕事に従事することが少なくなるとともに、興味・関心が薄れ、理解が低下していることが明らかになった。

4) 家庭環境の実態に対する子どもの認知は、抽象概念および非日常的空間や生活については低く、子どもの成長とともに認知率は上昇することが認められた。また、個別的、具体的生活用品の側面からみると、男女による認知の差異が大きくみられたが、住空間や生活全体としての認知については、男女差は大きくみられなかった。

5) 前報においても、台所空間や家事労働に関する側面に対する関心は女子の方に高い傾向をみたが、個別の生活用品の収納場所に対する認知という形でとらえることにより、このことがより明確に把握されたといえよう。